総　　門

蟇股（かえるまた）

成田山開山の歴史

正式名称は成田山明王院神護新勝寺　真言宗智山派大本山天慶三年（940 年）真言僧寛朝大僧正によって開山された。寛朝大僧正は朱雀天皇（すざくてんのう）より平将門の乱平定（へいてい）の密勅（みつちょく）を受け、弘法大師が敬刻開眼（けいこくかいがん）した不動尊像を奉持し難波津の港（現大阪府）より海路を下総に向かう尾垂（おだれ）ヶ浜（現在の千葉県匝嵯市横芝光町）に上陸し陸路成田の地に至る、乱平定（へいてい）のため平和祈願の護摩を奉修した。大任を果たした大僧正は再びご尊像を奉じて都へ帰ろうとした、ところが尊像を運ぶ輿が磐石のごとく微動だにしない。《我願いは尽くる事なし、永くこの地に留まりて無辺の衆生を利益せん》との霊告が響いた寛朝大僧正は尊像を堂宇に祀って都へ帰って朝廷に報告。天皇は深く感動し、諸堂伽藍を整え《成田山新勝寺》の寺号を授与東国鎮護（ちんご）の霊場として開山した。

総　門

全山の浄域を結界する総門は成田山開基 1070 年祭記念事業として建立された 2007 年に落慶。十六体の獅子頭と十二支の蟇股により荘厳され楼上には、《生まれ歳守り本尊》である八体仏が奉安されている。　　八体仏の制作は株式会社　翠雲堂（すいうんどう）

構造形式：五間三戸楼門・十二脚門（本柱の数は入れない総欅造り）　総門の総工費約１９億円

主要寸法　桁行：14m181　梁行：6m302　　高　さ：14m971

十六体の獅子頭　　蟇股の彫刻　　法◎輪

総門の右に建つ成田山金剛王院新勝寺の碑は約 1000 万円（大林組寄進）

彫　工：　（十六体の獅子頭と蟇股の彫刻）

塚原桂昌師（けいしょう）（後藤流)昭和 8 年生　８２歳（2015 年現在）（阿吽六体を彫る）

福島政山師（せいざん）（後藤流）昭和 12 年生　北澤一京師（いっきょう）（不明）昭和 15 年生

金剛組　（金剛重光）　世界最古の会社　創業 578 年　大林組

創業から 1435 年金剛一族により経営、しかし 2005 年高松建設の支援を受ける。

古墳時代が終わり飛鳥時代に、この年（574 年）聖徳太子誕生

成田山の総門は（元請け大林組）金剛組により約 3 年の歳月をかけて建立されました。

【参　拝】と【参　詣】

参拝（さんぱい）とは、神社　寺院　教会　墓廟などの宗教施設を訪れて、神仏や死者に拝む（または祈る）行為のことである。なお、祈願者本人に代わって参拝することを**代参**（だいさん）、祈願したい神社や寺院に参詣せずその方角に向って参拝することを**遥拝**（ようはい）という。

同様の言葉に「**参詣**（さんけい）」があるが、参拝は拝むこと（身体的な動作）に主眼があるのに対し、参詣は寺社へ詣でること（地理的な移動）に主眼がある。ただし、寺社に参拝する為にはそこへ詣でることになるので、一般には両者は同義の言葉とみなされている。特定の複数の社寺教会を続けて参拝することを**巡礼**・**巡拝**という。

総門の十二支の彫刻

総門二階には東から西へ八体仏が奉安されている
内側の蟇股は←の方向から見る。外側は外から見る。

北西	乾（いぬい）	↓	北	↓	（うしとら）艮	北東		
西	●	亥	●	子	●	丑	●	東
			戌	←	→	寅		
西	●	酉	●	法◎輪	●	卯	●	東
		↑	申	←	→	辰	↑	
西	●	未	●	午	●	巳	●	東
南西	坤（ひつじさる）	↑	南	↑	（たつみ）巽	南東		

上図は総門の蟇股（かえるまた）にある十二支彫刻の配置である。

成田山には江戸彫工三家(嶋村・石川・後藤)の作があります。
一つのお寺で御三家の作が拝見出来るのは、彫刻の宝庫成田山のみか？
新勝寺は代々彫工にしても画家にしても、全てその時代の名人に依頼している。

十二支の蟇股の取り付けの様子　　正面中央に[午]　一番奥に[子]が見える

蟇 股 の 干 支

子

丑

寅

卯

辰

巳

午

未

申

酉

戌

亥

[生まれ歳・守り本尊]八体仏

(子)	(丑・寅)	(卯)	(辰・巳)	(午)	(未・申)	(酉)	(戌・亥)
千手観音菩薩	虚空蔵菩薩	文殊菩薩	普賢菩薩	勢至菩薩	大日如来	不動明王	阿弥陀如来

千社札禁止

成田山の総門は楼門

門の形式と八体仏

成田山の総門は楼門である。(一階部分に屋根が無い)
宗吾礼堂の仁王門は二重門である。(一階部分に屋根がある)

法　　輪

宗吾礼堂の仁王門(二重門)

生まれ歳守り本尊
(株) 翠雲堂制作

法　輪　中心の蟇股(かえるまた)には、法輪(輪宝)が彫られている。
仏教の教義を示す物として八方向に教えを広める車輪形の法具として具現化され、
卍と共に仏教のシンボルとして信仰され寺院の軒飾りにも使用された。
仏法が人間の迷いや悪を打ち破り追い払うのを、古代インドの戦車の様な武器(輪)に例えたもの。

千社札(せんじゃふだ)

神社仏閣に納札するための単色刷りで屋号や土地名、模様と名前をスミ刷にした「**貼札**(はりふだ)」と呼ばれる「題名札」と、色を何色も使い、デザインにも凝った「**色札**(いろふだ)」と呼ばれる「交換納札」がある。
題名を記した札(題名札)が貼られている間は参籠(さんろう)(宿泊参拝)と同じ功徳があると民間信仰では考えられていた為、日帰り参拝者が参籠の代わりに自分の札を貼ったのが始まりであり、神社仏閣の許可をもらいご朱印を頂いた上で千社札を張るのが本来の姿である。
参籠(さんろう)とは＝社寺堂に籠り、神仏に祈願すること。